

六本木未来会議

デザインとアートと人をつなぐ街に

山本太郎 芸術家

Taro Yamamoto / Artist



CREATOR INTERVIEW ^{No} 119

山本太郎 Taro Yamamoto

京都造形芸術大学（現・京都芸術大学）美術学科日本画コースで学ぶ。在学中に、伝統日本画の技法をベースにした古典絵画に、ユーモアやパロディを感じさせる現代的な要素を加えた「ニッポン画」を提唱。2013年より秋田公立美術大学の准教授を務め、2018年からは母校京都芸術大学で准教授を務める。日本での展覧会やプロジェクトなどの活動をはじめ、企業とのコラボレーションや海外での活動も行っている。2007年の『VOCA大賞』、2015年の『京都市芸術新人賞』など多くの受賞歴を持つ。

クリエイターインタビュー

『“生きた美術”を生活の中で楽しむ』



目線を変えることで見えてくる美しさ。

published_2020.08.12 / photo_tada / text_akiko miyaura

圧倒的な強さと繊細さを併せ持つ伝統的な日本画の空気の中に、ある種、異物とも言える現代のモチーフが散りばめられている山本太郎さんの作品。とても美しいのにクスッと笑えたり、とても強いのに胸を締め付けられるような繊細さを感じたり。そんな不思議な世界観を発する山本太郎さんの“ニッポン画”の起源は、いったいどこにあるのでしょうか。リニューアルオープンしたばかりのサントリー美術館にてご自身の展示作品を前に、柔軟な発想を生み出す日常の視点や、人々が生活を営む街で取り組むアートへの思いなどをうかがいました。

日本文化に興味を持ったきっかけは、同世代の沖縄の若者の姿。

私の作品は、《マリオ & ルイージ図屏風》など、日本の古典絵画と現代風俗を融合させた“ニッポン画”を表現のベースとしていますが、日本文化に興味を持ったきっかけは、大学受験当時に訪れた沖縄での出会いでした。私は団塊ジュニアとよばれる世代で、美大に入ろうと思うと倍率10倍は当たり前、東京芸大に至っては50倍という時代。なかなか受験がうまくいかず、三浪することになってしまったんです。若い時に道が開けないと、やはり精神的にも迷宮入りしていく。そんな中、旅に出たのですが、沖縄県立芸大を受ける際に1ヶ月前に現地入りして、テントを背負いながら、沖縄を一周泊まり歩いた末に受験をするという謎の行動をしたんです（笑）。



マリオ&ルイージ図屏風プロジェクト 2015

スーパーマリオ 30 周年と琳派 400 年を記念し、風神雷神を " マリオ " と " ルイージ " に置き換えて作成したプロジェクト。作品は美術館「えき」KYOTO で開催された『琳派からの道 神坂雪佳と山本太郎の仕事』で発表された。その後、木版画の版元である芸艸堂より木版画化。

「マリオ&ルイージ図屏風」©Nintendo 山本太郎
2015 年

紙本金地着色 二曲一双 各 154.5×169.8cm



ニッポン画

山本さんの作品全般に対する呼称。日本画の技術と独特の空気感を生かしながらも、映画やゲームのキャラクターや今の日本の風景といった現代の視点を重ね、見事に融合させた山本さんの作品。ポップな響きと、海外に向けた視点も込めた「ニッポン画」という名で提唱している。

「四季紅白幔幕図屏風」2009 年

紙本金地着色 二曲一双 各 169×167cm

その中で、いろいろと感じたことがありました。沖縄には、本土とは違う歴史文化がある。その歴史や文化に、同世代だった若者たちがリスペクトを持っていることに刺激を受けたんです。ちょうど沖縄音楽を現代的にアレンジしたバンドなんかが出てきた時期で、とても自然に、自分たちの文化として誇りを持ってやっている姿がすごく新鮮でした。翻って、本土に住む私らは自分たちの文化を知っているんだろうかと省みたんです。そこからですね、日本文化に興味を持ち始めたのは。

ももとは現代美術をやりたくて美大に行こうとしていたのですが、沖縄での経験もあって受験前に日本の伝統文化もいいなと思い始め。結果、大学では日本画を専攻することにしたんです。でも、実際に学校で教わる日本画は私がやりたいこととは少し違って。残念ながら真面目な学生ではなくなり（笑）、大学のほとんどの時間を能楽の部活に費やすことになるんです。結果として当時の部活動が今に生きていますし、絵だけではない伝統文化に触れられたこと、" 生きた日本文化 " を知れたことは、私にとって大きな経験になりました。



能楽

大学時代は能楽部で活動する傍ら、観世栄夫氏、河村信重氏なども深い交流があった。2016 年には京都造形大学のウルトラプロジェクトの一環として、「山本能楽堂 移動式能舞台 鏡板制作プロジェクト」を実施。大阪の山本能楽堂が所有する移動式能舞台の鏡板の制作を行い、2017 年にお披露目された。画面一番下に銀箔が押された、ニッポン画らしい演出が施されている。

今に影響を与える " 生きた美術 " との出会い、幼い頃の経験。

能楽には、装束などの生活の中で使われる生きた美術が登場するんです。例えば屏風や掛け軸、扇子なども含め、家の中で使う形式でつくられている。そこに絵を描くことで、自然と美術を日常生活に取り込めていたんですね。もちろん、西洋絵画も家の中に飾るものですが、もともとは窓の代わり。ひとつの視点から一瞬を切り取る、ある種、写真を目指した表現ともいえるんです。一方、日本の絵画ははなから、それをやる気がないんですよ。だって、《四季山水図屏風》なんて一瞬どころか、4つの季節がひとつの作品に収まっているじゃないですか(笑)。もっと言えば、屏風をどう置かかは持ち主次第。開閉する屏風の角度によっても、座る場所によっても絵の見え方が変わるんです。ひとつの視点から見るができないからこそ、体感的に感じるしかない。西洋絵画と日本画は、そもそも持っている空間性や時制が、全然違うんです。

私が制作において大切にしている物語性も、能楽から多分に影響を受けていますが、もうひとつ、幼い頃の経験も関わっているように思います。うちの父親がちょっと変わった人間で(笑)、生まれ育った熊本の自宅で超私的な勉強会を開いていたんですよ。メンバーみんなで毎月1冊本を選んで読み、どんなことが書かれていたかを語り合うだけの会なのですが、今考えると、すごく豪華なメンバーの集まりで。作家の石牟礼道子さんや、歴史家の渡辺京二先生、詩人の伊藤比呂美さんなんかがいっぱいでした。勉強会後には必ず飲み会が始まるので、小さい頃はそこに混じって「太郎ちゃん、太郎ちゃん」とかわいがってもらいました。大きくなってからは、何度か会にお邪魔したりもして。そういった環境の中で育ったものあり、昔からどこか物語に興味はあったのだと思います。

実際に私の作品の中にあるストーリーは、最初につくり込むものではなく、最終的に立ち上がるもの。最初はその地へ出向いて現地の人と話をするとこが始まるのですが、恥ずかしながら、いろんな地方、地域には知らないことがいっぱいあるんですよ。住んでいる人は誰もが知るお話、その地域にしか伝わっていないことに多々出会います。そのすべてを追っかけられるわけではないのですが、自分なりに突き詰めていくと自然とストーリーができあがっていくんです。

日本文化は、ある意味、多様性を許容し、かつ許容の仕方が非常に面白いなと感じます。ハロウィンやクリスマスを取り入れてみたり、各国の料理が当たり前食卓に並んでいたり。小さな子が「好きな食べ物はハンバーグ」と言っても、違和感がないじゃないですか。ハロウィンだって、もとは違う意味を持った祭り子どもが主役のはずなのに、日本ではむしろ大人が楽しんでいる(笑)。そうやって、いろんな文化を受け入れて、日本流にちょっとだけアレンジしてしまうのが面白いなと思うんです。でも、実は近代に限った話ではないんですよ。文字として漢字を取れ入れながらも、ひらがなやカタカナをつくったり、漢文読みでなく独自の読み方をしたり。例えるなら日本という"OS"にデータを入れると、文字化けを起こすんですけど、「それでいいじゃん」と文字化けのまま、みんなが受け入れているようなイメージ。多様性を認めているようで、認めていないそのバランスが不思議で興味深いなと思います。

山本太郎 芸術家

TARO YAMAMOTO / Artist



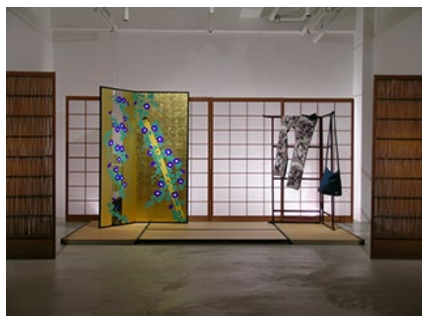
published_2020.08.12 / photo_tada / text_akiko miyaura

人との関わりの中で感じた、作品ではない何かが立ち上がる面白さ。

実は父親の仕事の関係で、小学校に上がる前の2年をアメリカで、小学4年生の冬からの1年をスウェーデンで過ごしたんです。ただ、その環境が今の自分に関係しているかが分からないんですよ。というのも、うちは4人兄弟なのですが、こういった日本的な美術の活動をしているのは私ひとり。だから、子どもの頃の海外経験が特段影響していると言えないのかなと、自分では分析していて。もし、何か影響しているとするなら、慣れ親しんだ人や場所と別れなければならないという感覚が、常にどこかにあることかもしれません。

日本で普通に幼稚園に通っていた子どもが、ある日、何も分からないままアメリカに連れて行かれ、「これで半分アメリカ人だ」くらいの気持ちでいたら、また日本に連れ戻されて。やっと日本に慣れた頃に、今度は「スウェーデンに行くぞ」と言われたという（笑）。今のようインターネットも身近でなく、小学生だからエアメールも書けないので、住む場所が変われば、仲間や街とも別れなければならなかった。自分で思うに、本質的には地方や地域に関わったり、コミュニティにどっぷり浸ったりするタイプだと感じるんです。でも、どこか一步引かざるを得ない環境で育ってきた。だからこそ、作品を通して、人や地域と関わっていきたいという思いがだんだんと強くなっていたのかなと思います。

人や地域と関わるプロジェクトが初めて形になったのは、2006年に京都で開催した『日本°画屏風祭』でした。例年、7月は祇園祭の季節。1ヶ月に渡り、さまざまな祭礼や行事が行われるのですが、山鉦巡行の頃になると鉦町の人たちが屏風や掛け軸、花器といった各家のお宝を外に出して自慢するという風習があるんですよ。町家の一番よく見えるところに、美術館にあってもおかしくないような美術品が平気で並ぶ。それこそ " 生きた美術 " が本来あるべき日常の中に置かれ、街の雰囲気と一緒に楽しめるんです。もともと見る側として楽しんでいたのですが、これを " 山本太郎版 " でやりたいと思ったのが『日本°画屏風祭』のきっかけでした。ただ、やはり町の方と若いアーティストがいきなりつながるのは難しかった。なので当時、お手伝いしてくださった方とお寺や着物屋さん、ギャラリーやケンタッキーなどを1軒ずつ回り、交渉して作品を展示させてもらいました。その時に、人と関わりながら作品ではない何かが立ち上がっていく面白さを強く感じました。その後も秋田の美術大学に勤めていたご縁で、「KAMIKOANI プロジェクト秋田」や「ネオ・クラシック!カクノダテ」など秋田各地の地域の芸術祭を企画したり、地域の方と交流するイベントをしたりする中で、作品づくりとはまた違った魅力にどんどん惹かれていきました。



日本°画屏風祭

「立体ギャラリー 射手座」ほか、京都市内9会場にニッポン画の屏風を展示。カーネル・サンダースが描かれた金屏風など、ユーモアと不思議な魅力を持った作品たちが京の街を彩り、話題を集めた。

その土地に住む人々の物語を読み解く美しき屏風たち。

地域に根差したプロジェクトの中で、ひとつ大きな経験になったのが地元・熊本で行った、熊本「ものがたりの屏風プロジェクト」。今も水害で大変な中ですが、2016年の制作時も熊本地震で大きな被害を受けていたんです。そういった時、作品をつくるアーティストは即時に力になれないと感じた部分もあって……。例えば音楽のアーティストであれば、すぐに現地入りしてチャリティーライブができる。でも、物をつくるとなるとどうしても時間が必要で、即時に動けないんです。そんな時、偶然にも地元で建築家をしている高校時代の先輩に声をかけていただいて、チャンスを得ることができました。先輩が古い家のリノベーションを主な仕事にしていたご縁で、今はなき老舗の表具材料屋さんから廃棄予定の屏風をいただき、京都造形芸術大学（現・京都芸術大学）の学生たちとプロジェクトをスタートさせたんです。まずは屏風を修復した上で、じゃあここに何を描こうとなった時、熊本の方たちから所縁のある品々と共に物語を募集し、それを屏風の中に閉じ込めることにしました。



熊本「ものがたりの屏風プロジェクト」

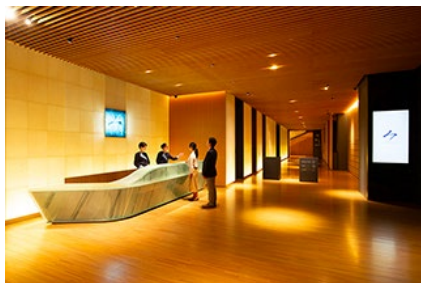
熊本地震による災害で、やむを得ず店をたたむことになった老舗「森本襖表具材料店」から譲り受けた屏風を、京都芸術大学の学生とのプロジェクトの一環として修復。美しく生まれ変わった屏風に、熊本県民から公募で集めた思い出品々を、応募者の物語とともに「誰が袖図屏風」の形式で描いた。

現在、サントリー美術館のリニューアル・オープン記念展『ART in LIFE, LIFE and BEAUTY』で展示しているのが、熊本で制作した作品。使った屏風は、衣桁という調度品にいろいろな着物がかった風景を描く「誰が袖図屏風」と呼ばれるもので、江戸時代の生活の空気を感じるものです。見る側が「この着物を着るのはどんな人で、どんな生活しているのかな?」、「こちらの着物は床に置いてあるけれど、あちらは衣桁にかけてある。どういうことなのかな?」と、物語を読み解いていく形式の屏風だと個人的には感じています。生活というのは、淡々とした日々の積み重ねでもありますが、同時にひとりひとりの小さな物語の積み重ねでもある。今回並ぶ屏風も、「このモチーフにはどんな意味合いがあるのかな」「モチーフの裏には、どんな物語が潜んでいるのかな」と想像すると、より楽しんでいただけるのではないかなと思います。



リニューアル・オープン記念展『ART in LIFE, LIFE and BEAUTY』

サントリー美術館のリニューアルオープン記念として『ART in LIFE, LIFE and BEAUTY』を開催。あらためて美術館の基本理念に立ち返り、酒宴で用いられた調度、「ハレ」(=非日常)の場にふさわしい着物や装飾品、豪華な化粧道具などから、異国趣味の意匠を施した品々まで、生活を彩ってきた華やかな優品を厳選。山本さんをはじめ古美術に造形の深い現代作家とサントリー美術館のコレクションをクロスさせた特別展示が行われている。2020年9月13日(日)まで開催予定。
展示風景 国宝 浮線綾螺鈿時絵手箱 サントリー美術館



サントリー美術館

1961年にオープンし、2007年より東京ミッドタウンへ移転。「生活の中の美」を基本理念とし、日本の古美術をはじめ約3,000件の品々を収蔵する。移転後、美術館の設計を手がけたのは建築家・隈研吾。「都市の間」をテーマに特徴的な縦の格子状のデザインやウイスキーの樽材を再利用した床などで構成されている。2020年7月にリニューアルオープンし、展示機能の強化や隈研吾監修によるエントランスなどの全面リニューアルが行われた。

写真：© 田山達之

山本太郎 芸術家

TARO YAMAMOTO / Artist



published_2020.08.12 / photo_tada / text_akiko miyaura

歴史や時間を重層的に見る視点、文化の多様性を受け入れる視点。

日常生活の景色というのは、私自身、コロナ禍でより見えてきた気がするんです。緊急事態宣言と桜の満開時期が、ちょうど被っていて。ふらりと出た散歩の最中に、人間の生活は変われど、花が満開になって散り、葉っぱになるという自然現象は変わらず営みが行われているということを実感しました。自然だけでなく、信号はけなげに点滅し、道路交通標識は当たり前そこに存在している。"変わるもの"と"変わらないもの"が、いっそう明確に見えた気がしました。

そうやって、目にして感じたことはあるものの、普段、自分がどんな視点で物事を見ているかは、正直わからないんです。もっと言えば、特別、他の方と違った視点を持っている自覚もなく(笑)……。ひとつ言えるとするなら、昔から受け継がれてきた日本の伝統——先の文脈で言うと"変わらないもの"と"時代とともに洗練されてきたもの""時代とともに変わる現代の風物"といった、歴史や時間を重層的に見ていく視点、文化の多様性を受け入れる視点はあるのかなと思っています。

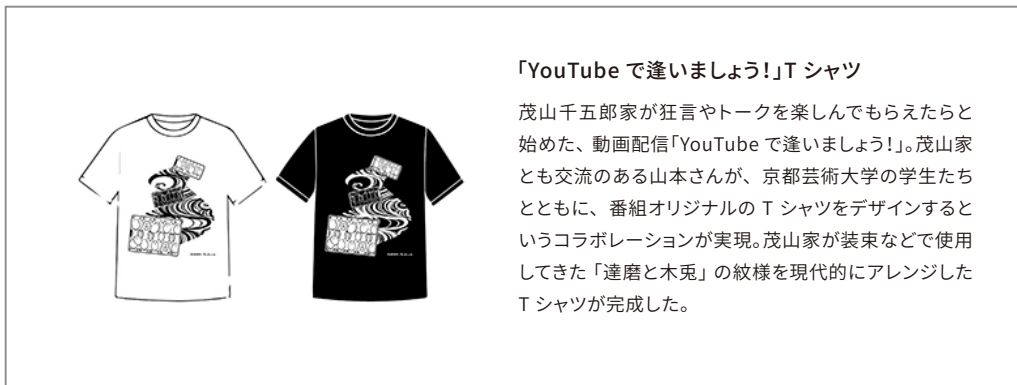
特に私が住んでいる京都は、わかりやすくそういった景色が街中にあふれていて、実はどこでも発見できるものなんですよ。歴史ある寺社仏閣は修理などを経て変わっていく部分もあるけれど、雰囲気はそのまま。歴史や伝統の重みを感じる場所でありながら、一方で私たちの生活はコンビニに寄ったり、ファーストフードを食べたりという中で成り立っている。その両方が組み合わさっているのが面白くて、それが自分たちの生活なんじゃないかなとも感じるんです。私の作品の中には、松の木と信号、桜とアメリカ国旗と言った異質の組み合わせが描かれているものが多くて、時にご年配の方が「松の木と信号が並んでいるなんて!」とおっしゃることもあるのですが、実はどこにでもある風景なんです。何となくよくない風景のように感じるけれど、描き方によって美しくなる。そういった目線で見ると、日常の何気ない風景が面白く見えてくるんじゃないかと思うんです。

美術館の中から、外の日常の世界へ。地続きのアート。

個人的に、コロナ禍でもうひとつ発見したことがあるんです。自粛期間中、舞台芸術の方々には公演がまったくなく、必然的に無収入になっていた。そんな中、京都の茂山千五郎家の狂言師たちが、3月の頭くらいから「YouTube で逢いましょう!」という動画配信を始めたんです。SNS で「仕事ないからやります〜す」くらいのテンションで、しかも無料で。また、その番組がすごくはっちゃけているんです。最初は練習用の舞台に集まって配信していたのですが、外出自粛でなかなか全員が集まることができず、途中から Zoom で参加する人も出てきて。それならと舞台に来られる人は " 体だけ " で芝居を、Zoom で参加する自宅待機組は " 声だけ " を担当して " アテレコ狂言 " を始めたんです。同世代が何人かいて以前からおつき合いがあるのですが、千五郎家の人たちって、いい意味でふざけた人たちなんです (笑)。伝統芸能なので本来は型が決まっているはずなのに、声を担当する人たちが型とは全然違うことをどんどんアドリブで入れ始めて、動く人をすごく困らせるっていう。まさに、この環境でしかない展開でとても面白く感じました。

さらに、観客の皆さんも、チャットで盛り上げられることが新鮮で。舞台上で狂言を見るとなれば、見慣れていないお客さんは「今のセリフ、わからなかった」と疑問が出ても、そのまま見続けるしかない。でも、YouTube 狂言では「今の、どういう意味ですか?」と書き込むと、よく知っている人が答えてくれるんです。しまいには、演目に出ていない狂言師が答えたり、狂言師仲間が「今、(演じている人が)間違えました」とツッコミを書き込んだりして (笑)。やる側にとってはもちろん、見る側にも新しい伝統芸能の楽しみ方が生まれていたんですよ。

私もゲスト出演させてもらったのですが、話の流れで『YouTube で逢いましょう!』のTシャツつくってよ』っていうことになって。学生と一緒にデザインをして、販売することが決まったんです。私の中では T シャツが視聴者の方に届いたら終わりではなく、皆さんがそれを着て出歩くところまでが重要。T シャツのデザインではあるけれど、ある意味、一連の流れを含めアートだとも思ったんです。SNS、YouTube というオンラインから始まったものが、最後は実際に着て街中に出ていくとオフラインで拡散される。その多重的な広がり方が、とても面白いと感じました。そして、気づけば、一連の流れが結構大きなプロジェクトになっていたんです。自分が何か意図的に仕掛けたわけではなく、いろんなことが組み合わさり、目の前で起こることを面白がってどんどん転がしていった結果、今までにはない伝統芸能の形ができた。こういった思いもよらないアートの繋がり、広がりが今後も生まれるといいなと自分でも期待しています。



街にアートが出ていくというのは、私自身も大事にしているところ。映画を見終わって、外に出た時にちょっと目線が変わっていることってありませんか？ 例えば ブルース・リーの映画を見てきた男性が、すべからくブルース・リーになってしまうのもそう。『アナと雪の女王』が流行っていた頃に、隣のトイレから 4 歳くらいの女の子が女王になり切って歌いながら出てきたのを目撃したのですが（笑）、それも目線の変化のひとつと言えるかもしれません。同じように、サントリー美術館で《誰か袖屏風》を見て家に戻った時に、いつもは雑多で残念に思っていた自分の部屋が、実は素敵な空間だと感じるかもしれない。そうやって美しいと思っていなかった景色が、美しく見えたり、日常にある当たり前の風景に気づけたりというのも美術作品の面白さのひとつ。そういう意味では、以前にやった『日本°画屏風祭』のような街全体を巻き込んだ、回遊式の展覧会を東京のような都心でいつかやれたらおもしろいと思います。

取材を終えて

普段、多くの人が思いつきもしないであろう発想や、何げない風景を見逃さない力は、実はとても純粋で真っすぐな視点から生まれるのだと感じさせられました。そして、人とのつながりを大切にしながら、目の前にあることを面白がる山本さん。その思考から発せられるお話はユーモアにあふれ、笑いにあふれたインタビューとなりました。(text_akiko miyaura)